



無自覚な特権とチームの対話



著：神山 努
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

2021年の対人援助学会年次大会において、渡辺修宏先生が企画された学会企画ワークショップ「対人援助実践をレポートするさらなる1冊」に私もお声がけ頂き、その際の発表をもとに本稿は執筆しています（ワークショップ等の詳細は対人援助マガジン内の渡辺先生原稿を参照）。渡辺先生からは企画の際に、対人援助の実践や臨床で行き詰った際の脱却、レポートのきっかけとなった本を紹介してほしいとありました。1冊の本「だけ」で自分がレポートされたことはないとおもうのですが、確かに自分が対人援助の中で悩んだ際に色々ともがいた中、ある一冊の本が最後のきっかけとなったり、そうでなくても自分に影響したりしたことは確かにあるなと思ひ、以下の2冊を取り上げました。

本題に入る前にどういう人間が本稿で書籍を紹介するか、少し説明した方が良いでしょう。私は現在、大学教育学部で特別支援教育に関わる教員養成の教育を行っています。学生たちの学びをサポートすること、そのために様々な知見が提供できるよう教育臨床を中心に研究することが中心業務です。前職は国立特別支援教育総合研究所で特別支援教育の教育課程等の研究に関わっていました。全国の様々な学校、教師と関わる中で、特別支援教育が国内でも多様な現状にあると実感しました。さらにその前は障害者福祉施設の支援員をしており、重度の知的障害、自閉スペクトラム症がある子どもから大人、知的障害がない発達障害がある子どもから大人と、広い年齢範囲の人々の支援に関わりました（この頃に渡辺修宏先生とお会いし、対人援助学会の年次大会で望月昭先生とワークショップすることもありました。それから何年もやり取りが続いています）。この時に成人期以降の方々と関わる経験があったことで、今も子どもの支援を行う際にも成人後を視野に入れて検討できるようになったと思います。大学では、行動分析学に基づき、障害がある子どもとその保護者への支援について学びました。

学生の頃は障害がある子どもや保護者の方へのサポートが興味の中心でした。その後、成

人期以降の方々と関わることでライフステージ全般を見通した支援を考えるようになり、研究職となってからは、障害がある人々に直接支援することが減った代わりに、教員や学校をサポートするために何ができるのかを考えるようになりました。大学教員になってからは年数が浅いのですが、学生指導を中心に考えながら、自分の問題意識もまた変わるのだろうと思っています。そんな人が以下の書籍を紹介すると思って読んでいただけたらと思います。

無自覚な特権

ワークショップではまず、「真のダイバーシティをめざして—特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育」を紹介しました。本書の目的は、「特権を持つ集団 (Privileged Group)」に対して、「社会的公正 (Social Justice)」について教育するための理論、実践を提示することとされています。ここでの「教育」は、学校教育に限らず、学ぶ・学ばれるという行為や関係全般を指しています。そして「特権」とは、ある社会集団に属していることで労なくして得ることができる優位性とされています。また、人は複数の社会的アイデンティティを有しており、社会的文脈によって特権集団にも劣位集団にもなるとされています。

本書の問題提起の一つに、「人は一般的に特権に無自覚」という点が挙げられています。無自覚である理由として、人は特権を有している際に、社会的アイデンティティについて考える必要がないためとしています。そしてこれと関連して、人が特権に無自覚であることの問題点は、特権を有する人が自らの優位性を前提とした生活をするのが、特権を持たない人々に不都合をもたらすこととしています。さらに、特権を持たない人の不都合の解消が、時に特権がある人々の生活を脅かすと、特権を有する人と有さない人の衝突の可能性を指摘しています。

この特権について私自身に翻って考えると、男性であること、日本に生まれて日本語を話し日本で就職して戸籍を持ち生活していること、今時点では医療上の障害等は診断されていないこと、大学教員であること、などの社会的アイデンティティに付与される特権を有していると思います。一方で、本書で指摘されているように、社会的文脈によっては有していない特権も指摘できると思います。確かに自らのこうした特権を日常で自覚することは少なく、本書を読んで考えたり、あるいは年齢と共に自らのライフステージが変わったことでいくらか自覚しやすくなったように思います。例えば男性であることの特権は、私が娘の親の立場になったことで、それ以前よりも考えるようになったと思います。また少し話題が変わりますが、娘が0-1歳の頃、家族で思いついて外食しようとした際も、授乳や離乳食は可能か、ベビーカーで入りやすそうかなどを考えて、それ以前のように自由に店を選べないと思ったことがあります。これも自らの社会的アイデンティティが変わったことで、それ以前に有していた特権の一つを有さなくなったということかもしれません。確かに、有さない立場にならない限り、少なくとも私は自らが持つ特権を自覚すること、それにより不都合を被る人がいることを想像することは難しいのかもしれませんが。そうした特権を学ぶ、考える

機会が得られるという点で本書は貴重だと思います。

私が専門としている行動分析学では、人を含めた生体の行動の生起要因を環境との相互作用から明らかにしていきます。望月昭先生はこの行動分析学を対人援助に応用できること、個々の人々の生活の質の向上につながる行動が維持される環境設定を具体的に明らかにして検証していく必要を指摘されています（望月，2007）。

行動分析学で特権を考えると、ある人において維持されている行動とその環境設定の中に特権と言える行動があるということかもしれません。そしてその特権行動（あるいは環境設定）を維持するために、特権の維持のために障壁となる他者（多くの場合はその特権を有さない人）を攻撃することがあるのかもしれません。特権を有する人とそうでない人の双方において生活の質を高める行動が維持される環境設定の検討が求められているのかもしれませんが。

チームの対話とミッションの共有

私は体を動かすのは好きですが、スポーツ観戦やスポーツ漫画を積極的に観ることはあまりありません（自分でも理由は分かりませんが）。「GIANT KILLING」は一人の選手としてのヒーローが描かれるというより、チームが育っていくことが描かれているため読んだのかもしれませんが。Giant Killingは大番狂わせという意味で、弱いチームが強いチームに勝つなどを指すようです。「GIANT KILLING」はサッカーの漫画で、監督が主人公である弱小チームが育ちつつ勝ち上がっていく、Giant Killingを起こそうとする漫画です。監督が主人公であることが特徴で、時に監督がチームを強くしようと引っ張り上げるシーンもあれば、選手同士で話し合い衝突し、チームが育つシーンもあります。個人的に、チームが目指すものは何か、選手同士で話すところは特に面白く読みました。

私が普段関わっている特別支援教育においても、学校がチームアプローチで特別なニーズのある子どもへの教育を行っていくことの意義が指摘されています。また、私が専門としている行動分析学における障害がある子どもへの支援でも、従来は個別支援が中心でしたが、近年は学校全体で在籍全児童生徒の教育を変えていく学校規模ポジティブ行動支援（school-wide positive behavior support; SWPBS; 庭山，2020）の有効性が着目されつつあります。

こうしたチームアプローチや SWPBS を行うには、学校内で「チーム」を形成する必要があります。チームではミッションとビジョン、何を目指しそのために何を行っていくか、を明確に共有する必要があります（三田地・堀，2007）。特別なニーズのある子どもの教育でも、通常学級への適応を目指すのか、問題行動の低減を目指すのか、長期的な生活の質の向上を目指すのかなどによって、実際に行うことが変わってきます。

SWPBS のように学校規模で教育を変える際に、大きく問題となるのはこのミッション、何をを目指すかの共有のように思います。上記のように目指すものが様々に考えられますが、時に個々の目指すもの、集団が目指すものが言語化されておらず、自覚されていないことも

あります。日々子どもへの指導に対応されている方からは効果的な指導法の具体化を求められますが、このミッションを明確にしないと何をもって効果的とするかは変わってきます。それには監督や管理職の大まかな方針提示も必要だとは思いますが、それを具現化するのは実際にプレイする人々なのでしょう。本書で描かれているような、「暑苦しい対話」がチームには時に求められるように思います。

引用

- ダイアン・J・グッドマン著・出口真紀子監訳・田辺希久子訳（2017）真のダイバーシティをめぐって—特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育．ぎょうせい
- 三田地真実著・堀公俊監修（2007）特別支援教育「連携づくり」ファシリテーション．金子書房
- 望月昭（2007）対人援助の心理学とは．望月昭（編）朝倉心理学講座 17 対人援助の心理学，朝倉出版，1-18.
- 庭山和貴（2020）学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）とは何か？—教育システムに対する行動分析的アプローチの適用—．行動分析学研究，34，178-197.
- ツジトモ著・綱本将也原案取材協力（2007～）GIANT KILLING．講談社

—つづく—